



TITLE:

向精神薬による精神障害治療効果
判定法に関する統計的研究(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

有留, 輝次

CITATION:

有留, 輝次. 向精神薬による精神障害治療効果判定法に関する統計的研究. 京都大学, 1967, 薬学博士

ISSUE DATE:

1967-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212103>

RIGHT:

氏 名 有 留 輝 次
あり とめ てる じ
 学 位 の 種 類 薬 学 博 士
 学 位 記 番 号 論 薬 博 第 45 号
 学位授与の日付 昭 和 42 年 1 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
 学 位 論 文 題 目 向精神薬による精神障害治療効果判定法に関する統計的研究

論文調査委員 (主 査)
 教 授 富 田 真 雄 教 授 岡 田 寿 太 郎 教 授 高 木 博 司

論 文 内 容 の 要 旨

精神障害の症状は複雑多岐であり、向精神薬によるその治療効果の判定には非常な困難を伴うのが通例である。著者は医師が精神分裂病患者より受ける印象を標準化し、客観的なものとするため、症状、行動などを下記の如く分類し、かつ患者の異状程度の評価尺度を設定した。

精神分裂病症状の分類	評 価 尺 度
P ₁ : 異 状 体 験	4: 極 端
P ₂ : 思 路 障 害	3: 高 度
P ₃ : 興 奮 状 態	2: 中 程 度
P ₄ : 精 神 活 動 低 下	1: 軽 度
P ₅ : 奇 妙 な 言 動	0: 正 常
I: 病 識 欠 如	

尚、うつ病の症状分類と評価尺度は「抗うつ剤効果判定研究会」のものを準用した。

以上の基準により記録された症例を統計的に解析することにより、上記の分類法ならびに評価尺度が、効果判定に有効適切なることを明らかにし、併せて効果判定の時期、使用薬剤の至適量を決定すると共に、症状の相関、治療期間に表われる諸種症状の消失率の有意差等についての知見を得た。

用いた薬剤は chlorpromazine, propericiazine

(精神分裂病治療)、および trimipramine (うつ病治療) の 3 種である。結果を略述すると下記の如くである。

1. Chlorpromazine

(i) 精神分裂病に対する至適量は個人差は極めて大であるが、300~800 mg/day (68%信頼度) であり、投与開始後 7~8 週間で、この至適量に達するのが適当である。

(ii) 効果判定は投与第 8 週目に行なうべきである。

(iii) 症状消失所要日数 (平均値) は、P₁ 9 週、P₂ 10 週、P₃ 6 週、P₄ 13 週、P₅ 8 週、I 17 週である。

2. Propericiazine

(i) 精神分裂病に対する至適量は chlorpromazine 同様個人差は大であるが、40~100 mg/day (68%信頼度) であり、投与開始後 9 週間でこの至適量に達するのが適当である。

(ii) 効果判定は投与第 8 週目に行なうべきである。

(iii) 症状消失所要日数は P₄、I を除き 5~8 週である。

3. Trimipramine

(i) うつ病に対する至適量は個人差は大であるが、100~300 mg/day (68%信頼度) であり、初回投与量は 50~100 mg より初め、漸増して 4 週目にこの至適量に達するのが適当である。

(ii) 効果判定は投与第 4 週目が妥当である。

(iii) 症状消失所要日数 (平均値) は、すべての症状を通じて約 5 週間である。

以上を総括すると、著者の設定した判定基準により記された症例記録を統計的に解析することにより、向精神薬による治療法およびその治療効果を明確に決定できるものと考えられる。

論文審査の結果の要旨

精神障害の治療に用いられる向精神薬の効果判定には、その症状が複雑であるがために困難を来す場合が多い。著者は、医師が患者より受ける印象を標準規格化し、これを客観的なものとするために患者の症状、行動等を分類、患者の異常程度の評価尺度を設定し、向精神薬による精神障害の治療効果の判定法を統計的に研究した。

すなわち精神分裂病についてはその症状を 6 種に分類、それぞれに 5 種の評価尺度を設定し、この基準により記録された症例を統計的に解析した。この目的に用いられた薬剤は精神分裂病治療薬として通常用いられている chlorpromazine および Propericiazine の 2 種である。

またうつ病の症状分類と評価尺度は抗うつ剤効果判定研究会のものを準用、うつ病治療剤である Trimipramine を用いて分裂病の場合と同様に症例を統計的に解析した。

以上の基準により記録された多数の症例を統計的に解析することにより、この分類法ならびに評価尺度が、効果判定に有効適切であることを明らかにし、効果判定の時期、使用薬剤の適量を決定するとともに、症状の相関、治療期間にあらわれる種々症状の消失率の有意差等について新知見を得た。

本論文は薬学博士の学位論文として価値あるものと認定する。